中央研究院歴史語言研究所蔵

『段氏説文補正』について

高橋　由利子

一、引言
二、『段氏説文補正』
三、『段氏説文補正』と『説文解字段注』
1、補字例における比較
2、改字例における比較
3、補注例における比較
4、改注例における比較
四、結論
収録字一覧表

一、引言

かつての北京人文科学研究所[1]には、『段氏説文補正』という書物が存在した。一九三八年同所発行の蔵書目録に「段氏説文補正不分卷　清段玉裁撰　舊鈔本　一函　四册　一一三五九號」と著録されているものがそれである。楊家駱氏はそれについて次のように述べている。

「段氏說文解字注、嘉慶十三年刊成後、嘗自撰補正、駱曩於北平人文科學研究所圖書館見其鈔本一册、……」（重印段氏說文解字注序）[2]

この記述から楊氏は『段氏說文補正』を実際に人文科学研究所で見たこと、楊氏が見た本は四冊ではなく一冊であったこと、また楊氏はそれを段玉裁が『說文解字注』を完成させてから後に書いたものと考えていたことがわかる。

目録での著録と、実際の閲覧者がある以上『段氏說文補正』という鈔本が確かに存在したことはまちがいないと思われるが、その原本がはたして本当に段玉裁の撰したものであるか、また楊氏の言うように「段注」完成後に書かれたものであるかについては、議論の余地を残す。

特に段氏自身のそれについての直接の言及も今のところ見あたらない以上、まずはその書物が一体どんなものであろうかという内容の検討から入っていくのも一法であろう。

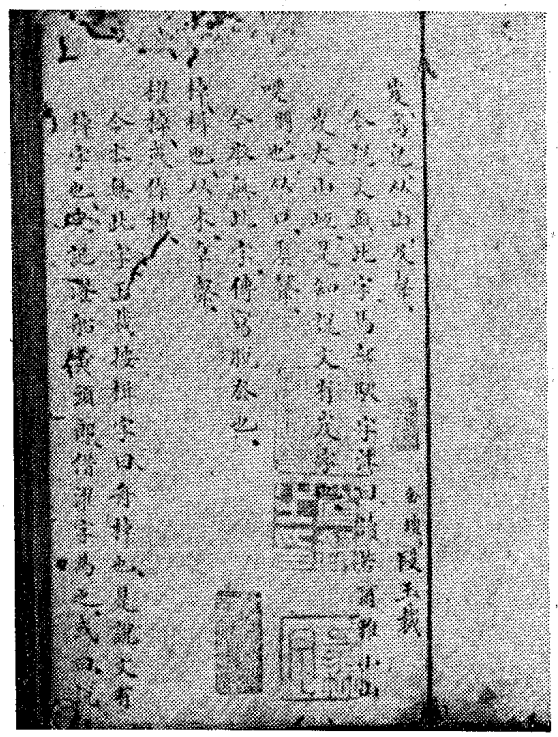
筆者は最近その書物が中央研究院歴史語言研究所図書館にあることを、同所発行の蔵書目録によって知り、そのマイクロフィルムを入手した。[3] 以下の論考はその解読の結果にもとづいて行なうものであり、この『段氏說文補正』がどのような内容を持ち、段玉裁の『說文解字注』とどのような関係にあるかを解明することを、その主目的とする。

二、『段氏說文補正』

マイクロフィルムは、最初の一コマを除き、九十二コマ。一コマが原書の見開き一葉に相当する、標題、序文はなく、最初の本文が始まる第一葉右下に「東方文化事業總委員會所藏圖書印」「傅斯年圖書館」[4]「省錄之印」「華山」「史語所收藏珎本圖書記」の五印が押されている。

その本文は、

金壇段玉裁



岌高皃从山及聲

今説文無此字馬部駂字注曰讀若爾雅小山岌大山峘是知説文有岌字也

に始まり、

孑

説文五百四十部林罕字源偏旁小説增一部序云五百四十一字所增

葢孑部釋夢英不知減孑部併入了部而誤刪丨部以合五百四十之數

郭忠如與夢英書曰見寄偏旁五百三十九字按夢英偏旁石刻正五百四十字而恕先云五百三十九者不然其孑部也又曰説文字源惟有五百四十部孑字後校在子部今目錄妄有更改按石刻后校在子部之子係了字之譌夢英偏旁當刪孑入了而補一又説文宂在冂部丈在十部而玉篇宂丈別爲部成五百四十二部張美和撰吳均增補復古編叙云許慎説文以五百四十二字爲部葢誤以玉篇爲説文也

に終る。一行十九字、半葉九行。楷書。[5] 最終葉左下に「史語所收臧珎本圖書記」「東方文化事業總委員會所臧圖書印」の二印があり、左上に一七〇六二八のアラビア数字がある。

形式は、最初に説文所收の一字とその説解をあげ、次行に一字下げて注釈を加えるのが一般的なスタイルである。この形式で書かれている收録字は二百四十九字である。（本稿末の一覧表参照）

その注釈は内容から見て次のように分類できる。

一、従来の説文の諸本に收録されていない字を説解と共に追加補充するもの（補字）。

二、従来の説文の諸本に収録されているが、字体が誤っているものを改めるもの（改字）。
三、従来の説文の諸本の説解の文で、脱去している文字を補うもの（補注）。
四、従来の説文の諸本の説解の文で、誤っている文字を改めるもの（改注）。
五、その他のもの。

以下、順にその最も典型的と思われる例をあげ、分類の説明の補いとする。なお、該当文字の前につけられた数字は、本稿末に附した一覧表の中での通し番号である。（標点筆者）

一、説文諸本の未收字を補うもの（補字）

1岌、高皃、从山及聲、

今説文無此字、馬部馺字注曰、讀若爾雅小山岌大山峘、是知説文有岌字也

このような補字例は、1岌・2嚜・3棹・4櫂・5跬・16泊・35磾・37叵・38簉・39鰈・40庇・41頎・42摻・43抴・44揥・61酓・62鐳・63劉・68濤・69秜・84鯛・87嶠・93冽・99芾・101卄・111鼏・131霄・133攉・150鄂・167池・176瀚・192蛤・197銘・202鸛・209粕・246瑩の字がある。

補充すべしという論拠として、例にあげたように、説文の他の文字の説解に用いられていることをあげるものが最も多く（1・3・4・6・16・37・39・40・43・63・197・202）、その他は、他書における引用（文選李善注等）である。

また、これとは逆に、説文に收録されている字を刪除すべしとするものもある。94瀨・154磬・231鼕がこれにあたる。

二、説文の字の誤りを改めるもの（改字）

49龕、龍皃、从龍今聲

今各本作龕、攷九經字樣曰从龍今聲、作龕譌、近刻本或作含聲尤誤、

このような改字例には、8蠙・11瞭・12蔋・13雝・14台・15胝・19餳・23呷・27彖・28蠢・29慘・30隩・31墜・32佩・34碫・49龕・50翟・53欄・56幔・96奭・100蓟・105聊・114貁・118栖・125鞎・140卒・141罕・142盩・143執・144報・145囿・146筲・147敎・152蒻・155諺・175瀷・183涐・213謚・215硩・225矜がある。

三、説文の説解の文字を補うもの（補注）

54驫、衆盛也、从木驫聲、逸周書曰、驫疑沮事、

今各本注内疑字上無驫字、依玉篇補、

7郡・22唸・33楷・54驫・66瑤・67離・71沬・83鰻・85圞・90滭・91汱・92凜・97郼・113篝・117洒・137邮・159漳・169沭・191朕・210梏・211桎・224蔑・232梬・239椶・241讀・245虫がこれにあたる。

四、説文の説解の文字を改めるもの（改注）

107賴、利也、从貝刺聲、

利、今本作贏、攷漢書高帝紀晉灼注引説文、賴利也、按、賴利同在古音弟十五部、是爲同部轉注、

6沅・9騋・10輳・18洵・24温・25湔・26豕・36馞・46厠・47參・48麗・59鋝・64珧・65璗・72壟・79較・81呬・86瓢・88斡・89薹・95皕・98蔽・103眊・104彔・106俚・107賴・108偓・110鼐・112臒・115來・116酎・119虢・120彪・121梟・122臬・123必・124梅・126闢・127湛・128儿・129簡・130（序）・132霄・134豳・135鄙・136郝・138甚・139邛・148瑲・149匏・153梧・156鹵・157淶・158滬・160沇・162泡・163荷・164滑・165浚・168淮・171濁・173洹・174洛・177濡・178溱・179溼・180湳・182瀕・185洐・186灑・188漾・189袞・194羒・195牂・201癘・203殃・206瑤・207粲・214誰・216鮖・220浚・221涪・223甓・227亟・230磬・233輜・234輯・235轈・237筑・238栟・248坏がこれにあたる。またこれに準じるものとして、二字の説解をそれぞれ互いに交換したもの（換注）がある。20滎と21濘、51樗と52槫、218鼉と219鱓がこの例である。

五、その他

これらの他に、文字について論じたもの（論字）として、57禮・58工・102𢍰・161憑・187叉があり、また説解について論じたもの（論注）として、55懾・151璜・170洋・172渚・181滻・184涷・190囪・193緋・196羯・198黟・199褻・200矍・204豶・205盬・208戌・217栭・226舫・229鼞・236慉・240鼎があり、また、部首について論じたもの（論部首）に249孑があり、字の使用例について論じたものに70朐がある。

三、『段氏説文補正』と『説文解字段注』

『段氏説文補正』（以下『補正』と略称）と段玉裁の『説文解字注』（以下『段注』とする）とを、同一字の注釈について比較対照することは、『補正』自体の内容の検討に役立つだけでなく、『補正』と『段注』の成立順序や、『段注』の成立過程を考える上でも大変有意義である。以下第二章で行なった内容の分類に沿ってその対応関係について論ずる。(6)

一、補字例における比較

1、一致例　一致例とは『補正』で『補充すべし』とした文字を『段注』でも補充して載せているものである。42摻を例にとる。最初に『補正』の文を、次に『段注』の文を、『補正』の形式に合わせて挙げる。以下同じ。

摻、斂也、从手參此音反聲、

今各本無摻字及注六字、毛詩遵大路、正義引説文、摻、从手參此音反聲、訓爲斂也、操、从手臮此遙反聲、訓爲奉也、反音注於某聲二字之間、葢唐本説文如此、今毛詩借爲攕字、

（以上『補正』）

摻、斂也、从手參聲、

各本無摻篆及解、今依鄭風遵大路正義所引補、詩、摻執之袪、傳曰、摻攬也、正義引説文、摻、參聲、斂也、操、

㮚聲、奉也、葢因俗二字相亂、故分引之、今本無摻篆、亦由南朝以來摻操不別之故、凡許書鼎部鼏鼏相似而失其一、衣部袗袀相似而失其一、水部沱池相似而有沱無池、皆此類、所斬切、古音在七部、　（以上『段注』）

これら二つを比較すると、『補正』は単に補充の論拠となる例文をあげているだけであるのに対し、『段注』では論旨がより整理された表現になっている。また摻字が脱去した原因について、他の字の例もあげてくわしく述べている。

なおそれぞれの冒頭の表現からわかるように、『補正』における「字」および「注」が、『段注』における「篆」および「解」に相当している（傍点箇所）。このような「補字」における一致例は、16泊・41頎・42摻・43拙・61酋・63剉・84綢・93洌・94瀨・101卄・111鼏・133攉・154鼛・167池・231鼕がある。

2、矛盾例

『補正』で「補充すべし」としているのに『段注』では補充されていないもの。例えば第二章の一の補字例にあげた1岌がそれにあたる。ただし『段注』では別の箇所でそれに関連したことを述べている。今、説明の便宜上、重複をいとわず『補正』と『段注』を並列する。

岌、高皃、从山及聲、

今説文無此字、馬部駂字注曰、讀若爾雅小山岌大山岳、是知説文有岌字也　（以上『補正』）

駂、……讀若爾雅曰小山駂、

大徐本此下有大山岳三字、葢淺人所增耳、小山駂今爾雅作小山岌、許所據古本也、讀若二字葢賸、（以上『段注』）

『補正』では説文の他の収録字の説解部分に岌字が使われており、しかもそれが爾雅釋山の文の引用であるところから、もともと説文の中に岌字が（親字としても）収録されていたにちがいないと結論を下している。

ところが『段注』ではその根拠となった爾雅の引用文自体を「今の爾雅は岌字を用いているが、許慎の拠った古本の爾

雅は岌字ではなく馺字を用いていた」として、説解の中の岌字を馺字に変え、岌字の存在自体を抹消している。

この『補正』と『段注』の説のどちらが正しいかという議論は興味深い事項ではあるが、ここではこの二説の論理の発展関係にまとをしぼり、比較すると、『補正』では単に他の字の説解文を引用してその根拠としているだけにすぎないのに対し、『段注』ではその引用文体の妥当性や、許慎の用いた原本との関係にまで論及している点で、思考の過程を一歩進めたものと考えられる。（それを段玉裁の独断とするか、明察とするかはまた問題を異にする。）

このような『補正』と『段注』とで「補字」に関しての結論を異にする矛盾例は、1岌・2墜・3棹・4櫂・5畦・35磾・37叵・38簉・39鰈・40庳・44揥・63剽・68濤・69秜・87鸕・99芾・131霄・150鄂・176滌・192蛤・197銘・202鸛・209粕・246罄がある。そのうち1岌・3棹・4櫂・37叵・39鰈・40庳・63剽・69秜・87鸕・150鄂・197銘・202鸛については、例にあげた岌字のように、「段注」の他の字の箇所で、採用しないことに関連する言及がある。それは「補正」が根拠としてあげた引用文の妥当性を否定する（他には例えばその字が仮借字としての使用例であるとするなど）ものが多い。

二、改字例における比較

1、一致例　『補正』・『段注』ともに字が改められているもの。152蒻を例にとる。

蒻、蒻或从衍、同、

按、今各本作荇、傳寫脫云水旁也、爾疋釋文曰說文作蒻、五經文字曰蒻蒻二同、此唐本作蒻之證、衍字見水部、

（以上『補正』）

蒻、蒻或从衍、同、

各方作蒻、注云或從行、今依爾雅音義・五經文字正、

（以上『段注』）

この二つの注釈はその論旨や引用例において一致しているが、『段注』の方がより整理された簡潔な表現となってい

る。なおここでは『段注』でも説解について「解」ではなく「注」という表現を用いている。

このような一致例には8蠙・11瞭・13雝・14台・19錫・23甲・27彖・28蠡・29慘・31墜・34碫・49龕・50翟・53欄・56嚶・96奭・109蓟・105聃・114豫・125輟・140卒・141睪・142盩・143執・144報・145囷・146籌・147敔・152蒋・155諺・213謚・215硩・225矜がある。

2、矛盾例　『補正』では字を改めているのに『段注』では改めていないもの。12蔋を例にとる。

蔋、艸旱盡也、从艸淑聲、詩曰蔋蔋山川、

玉篇廣韵皆作蔋、淑聲、今說文各本作蔋、俶聲、誤也、　（以上『補正』）

蔋、艸旱盡也此與艸木多盆反對成文、从艸俶聲徒歷切古音在三部、詩曰蔋蔋山川、

大雅文、今詩作滌滌、毛云滌滌旱氣也、山無木、川無水、按、玉篇廣韵皆作蔋、今疑當作蘇、艸木如盪滌、無有也、叔聲淑聲字多不轉爲徒歷切、詩踧踧周道、踧字亦疑誤、（以上『段注』、なお対比の便のため、説解の一部を割注のままとした）

ところでこの字については段玉裁は『詩經小學』でも論及しており（巻二十五）それは、

滌滌山川

說文「蔋、艸旱盡也、从艸俶聲、詩曰蔋蔋山川」、玉篇「詩云旱既太甚、蔋蔋山川、蔋蔋旱氣也、本亦作滌」、廣韵「蔋、草木旱死也」となっている。（括弧筆者）今、この三者を比較してみると、

『補正』では、玉篇・廣韵は蔋になっているので、蔋は誤りであるとし、蔋を蔋にかえている。しかし今の詩の文との矛盾には論及していない。

『詩經小學』では、說文・玉篇・廣韵の說を並列引用しているが、結論は下していない。

『段注』では、今の詩の文との矛盾に論及し、玉篇・廣韵の説を引いてから、自説を述べ、藤とすべきではないかとしている。それは直接には、叔声淑声では徒歴切という反切になじまないという諧声符の音を根拠としているが、『詩經小學』に引く玉篇の「本亦作滌」がその発想において一脈通ずるものがあるのではないだろうか。(7) もちろん『補正』と『段注』の二者では、『段注』の論考が深化されていることは指摘するまでもない。

このような改字例における矛盾例は他に、30隊・32倗・183洩があるが、非常に少ない。

三、補注例における比較

1、一致例　80姎を例にとる。

姎、女人自稱姎我也、从女央聲

按、姎我方言也、如吳人自稱阿儂、今各本注内無姎字、乃不通人刪去也、後漢書西夷傳注引說文姎女人自稱姎我也、音胡朗反、廣韵上聲三十七蕩、姎字注女人自稱姎我、　（以上『補正』）

姎、女人自偁姎我也、

各本我上奪姎、今補、後漢書西夷傳注、廣韵三十三蕩皆引女人自偁姎我、姎我聯文、如吳人自偁阿儂耳、

从女央聲

烏浪切、按、後漢書胡朗反、廣韵烏朗切、十部、　（以上『段注』）

両者は論旨、引用例ともに一致しているが、『段注』の方がより整理された簡潔な表現である。このような一致例には、7郡・22唸・54曇・67離・71沬・73肸・74蔼・75屠・77溓・78轟・80姎・83艐・90滭・91波・92凜・97蔀・113篝・137邮・159漳・169沭・210梏・211桎・224蔑・232梬がある。

2、矛盾例　『補正』で補った説解を『段注』では補っていないもの。241讀を例にとる。

讀、讀列二字一句中止也、从言貴聲、司馬法曰師多則人讀、讀止也、

今各本少讀列二字、魏都賦曰襲偏裂以讀列、李善注引說文讀列中止也、玉裁按、讀列蓋漢人語、如邀極之類、故左思用之、李善誤讀列中止也、四字爲句、乃云或列或止矣、劉逵魏都賦注引司馬法師多則讀、無人字、

（以上『補正』）

讀、中止也、

中止者自中而止、猶云内亂、魏都賦李注引說文讀列中止也、此依賦文衍列字、賦云齊被練而銛戈、襲偏裂以讀列、非中止之訓也、

司馬法曰師多則民讀、

民各本作人、今依廣韵所引

讀止也、

此以止與中止義別也、凡偁經傳而又釋其義者皆必其義與字本義不同、如聖讒說曰罔莫席皆是、

（以上『段注』）

ここでの主な矛盾は最初の説解の「中止也」の前に「讀列」という二字を補うかいなかにある。『補正』では魏都賦李善注に引く説文をその根拠にあげ、李善の説文の読みとり「讀、列中止也」を、「讀、讀列中止也」と正し、讀列は二字の漢語であるとして、この二字を説解の中に補うことを主張する。

これに対して、『段注』では、その引用文そのものを、李善が魏都賦の本文の「讀列」という二字にひきずられ、誤って、列字を説文の引用文に混入したものであるとし、正しい引用文は「讀、中止也」となるとして、「讀列」の二字を「中止也」の前に補う必要を認めない。また賦の本文の「讀列」の意味自体も「中止」ではないとする。

この二説のいずれを是とするかはまた別の問題とし、ここでは『補正』が根拠とした引用文自体の妥当性について論

考を加えている点で、『段注』説をより深い思考の過程を経たものと考えたい。

このような矛盾例には、33楷・66瑶・82盒・239㩦・241讀がある。

四、改注例における比較

1、一致例　106俚を例にとる。

俚、賴也、从人里聲、

今文賴作聊、誤也、漢書季布傳、晉灼注引楊雄方言俚聊也、引許慎說文俚賴也、是晉時說文與今本不同、今誤、以方言改說文也、聊、許氏曰耳鳴也、俚在古音弟一部、聊在弟三部、俗稱無俚爲無聊者、部近假借、說文多用本義、不當以耳鳴釋俚字也、

（以上『補正』）

俚、賴也、

賴、各本作聊、此用方言改許書也、今依漢書季布傳晉灼注所引正、方言俚聊也、語之轉、字之假借耳、漢書曰其畫無俚之至、無俚卽今所謂無賴、亦語之轉、古叚理爲之、孟子稽大不理於口、趙注理賴也、大不賴人之口、

从人里聲

良止切、一部、

（以上『段注』）

この両者は論旨、例文ともに一致しているが、『段注』の方がより簡潔で論旨が明解であり、また仮借の具体例が多く引いてある。

2、矛盾例　改注例はほとんどすべてが『段注』と一致しており、矛盾例は107賴・220洨・238栟のみである。栟を例にとる。

栟、栟閒也、

説文無檻字、今本作檻、疑誤也、司馬楊雄賦皆作幷閭、　（以上『補正』）

栟、栟檻逗椶也、

各本奪椶字、今依韵會本補、廣雅劉逵引異物志皆曰栟檻椶也、上林甘泉賦字作幷閭、南都吳都賦字作栟檻、許書有栟無檻、檻因栟之木旁而同之耳、

从木并聲、

府盈切、十一部、　（以上『段注』）

『補正』では説文に檻字がないことから檻を閭に改めているが、「段注」では韵會によって「椶也」を補い（これで栟と椶は互訓となる）、別の資料でその説を補強している。また、説文に檻字がないのに栟檻となっているのは栟字の木へんにあわせたものとし、そう書かれている別の二つの賦の文をあげている。

『補正』が説文に檻字がないことがすなわち栟檻が誤りであると単純に考えているのに対し（この単純さは逆に栟字の説解に檻字が使われているから、説文にはもともと檻字があったという論にもつながり、『補正』の補字例に見える論理とも一致する）、『段注』は他の資料をも照らし合わせ、説文に檻字がないのに栟檻となっている理由についても言及している点で、論考の過程を一歩進めたものと言える。

四、結　論

以上を表にまとめると次のようになる。

改字、補注、改注、その他の各項については一致例が圧倒的に多い。補字の項については矛盾例の方が多いが、そのうち何らかの形で字を補わないことについて言及しているもの12字を除くと、完全な矛盾例は12字となり、非常に少な

	総数	一致	矛盾
補字	39	15 (27)	24 (12)
改字	40	35	5
補注	32	24	8
改注	97	94	3
その他	28	28	0
計	236*	196 (208)	40 (28)

＊重出字及び二字にまとめて一つの注をしているものがあるので総字数とは一致しない。

くなる。

このように『補正』はその注釈の内容において、『段注』と非常によく一致しているところから、その原本が段玉裁自身の撰になることはほぼまちがいないと思われる。

それでは『補正』と『段注』は一体どのような関係にあるのだろうか。

前章で対比したように、その両者は、一致例についてはそのいずれもが、『段注』の方が『補正』よりも、論旨がより整理されて明確な表現となっており、また引用例も多くなっている。また一方、矛盾例についても、いずれも『段注』の方が『補正』よりも、思考の過程をより重ね、深化されたものになっている。(8)

これらのことから、次のような推論が可能と思われる。

段玉裁は説文の注釈書を作るにあたり、まず問題のある字を取りあげて検討し、それらについての簡単なノートを作った。それが『段氏説文補正』の原本となったものであろう。

段玉裁は、補字の必要のあるもの、改字の必要のあるもの、補注の必要のあるもの、改注の必要のあるもの等を適当に取りあげ、いくつかの関連字をまとめながら校定の作業を行なった。その基礎の上に、校定の対象をもっと拡大し、内容を深化させ、原義についても注釈を加え、まとめあげたものが、『説文解字注』である。

いいかえれば、『補正』は『段注』を補正したものではなく、『説文』を補正したものである。ただしその内容がほとんど一致していることからみて、段玉裁が『段注』を作る前に説文の疑問箇所をとりあげてメモした簡単なノートである。しかしながら、それが初期につくられた簡単なものであるだけに、『段注』の持つ基本となる核を最もよく表現している。『段注』巻十五下に言う「復以向來治説文解字者、多不能通其條毋、攷其文理、因悉心校其譌字、爲之注、凡三十卷」の「校其譌字」は、この『段氏説文補正』の中ですでに始まっていたのである。

注

(1) 人文科学研究所図書館は現在社会科学院図書館となっており、北京王府大街の華橋大厦の向いにある。もとここは東廠胡同と呼ばれ東方文化事業総委員会があった。当時の情況を御存知の方から是非お話を伺いたいものである。なお、『段氏説文補正』という書名は同図書館に収められる際につけられたものであろう。

(2) 増訂學術名著第一輯増補樸學叢書第一集第一冊　説文解字段注の巻頭の序文（一九六一、台北世界書局発行）

(3) 書物の原物は未見。全文の掲載は今回は行うことができない。

(4) 佐藤保教授が一九八〇年に歴史語言研究所に行かれた際、傅斯年図書館は史語所内にあったそうである。

(5) その筆跡は三人の手に成り、いずれもが筆者が一九八〇年北京図書館で見た『説文解字讀』の筆跡とも異なる。

(6) 以下『段注』の引用はすべて經韵樓本による。また一部省略した場合もある。

(7) 『詩經小學』と『補正』の関係については、『補正』143 瑲字の注に「今各本注内鋚字作鞗、誤也、鋚轡首銅也、凡詩經鞗革

皆鎣革之譌、革者勒之省、古鐘鼎鎣多省作攸、攸即攸字、詳見詩經小學」とあることから、『補正』は『詩經小學』より後に書かれたと考えられる。またこれに該当する巻二十五鎣革の項に末尾に乾隆戊戌閏六月初五日の日付があるので、『補正』はこれより後のものとなる。なお、この「乾隆戊戌」という年は、段玉裁が『古文尚書撰異』において『說文解字讀初稿』と記している年でもある（巻二十六顧命）。またここに言う『說文解字讀』は、筆者は一九八〇年夏北京図書館で同名の書物を偶見し、その表紙より序文に到る九コマのマイクロフィルムを入手したが、帰国後京都大学の阿辻哲次氏がその一部を手写されたことを知った。その後阿次氏が東方学報第五十三冊に発表された手写の全文と、この『補正』とを比較してみると、二文字については收録字が一致し（上と禮）、またその注釈もほとんど同文である。ただ、收録の字数や字順、また古音についての記述等についてちがいが認められるようである。『讀』と『補正』の関係については、『讀』の全文の利用を待ち、更に考究を加えるべきであろう。

（8）紙面の都合により省略した諸字についてもこの推論が成り立つと信ずる。このことは機会を見て追加・詳述したい。

『段氏說文補正』收録字一覽表

1 岌
2 嗟
3 棹
4 櫂
5 跬
6 沅
7 郡
8 蠙
9 騋
10 梭
11 瞝
12 蔋
13 雝
14 台
15 胸
16 泊
17 洒
18 洵
19 錫
20 滎
21 濘
22 唸
23 呷
24 温
25 瀕
26 豕
27 彖
28 蠡
29 惕
30 隊
31 墜
32 衢
33 楷
34 碫
35 碑
36 鄢
37 匡
38 簉
39 鰈
40 庇
41 頎
42 摻
43 拙
44 揥
45 飾
46 厰
47 參
48 麗
49 龕
50 翟
51 樗
52 樻
53 欄
54 驫
55 懾
56 嚶
57 禮
58 上
59 鋝
60 醨
61 酓
62 鐳
63 劉
64 珧
65 璗
66 瑤
67 離
68 濤
69 馜
70 朐
71 沬
72 壟
73 肸
74 嶲
75 屠
76 戾
77 溥
78 轟
79 較
80 姎
81 呬
82 盦
83 艐
84 鯛
85 圞
86 瓢
87 鷮
88 斡
89 薑
90 澤
91 波
92 凜
93 洌
94 瀨
95 皕
96 奭
97 郪
98 蔽
99 芾
100 蓟
101 卅
102 弨
103 眩
104 彔
105 聊
106 俚
107 賴
108 偓
109 佺
110 鬲
111 鼎
112 釀
113 籌
114 貁
115 來
116 酎
117 洒
118 栖
119 虢
120 虒
121 梟
122 臬
123 必
124 梅
125 輟
126 闢
127 湛
128 儿
129 簡
130 （序）
131 霄
132 霄
133 權
134 圈
135 鄜
136 郝
137 邮
138 甚
139 邛
140 卒
141 睪
142 盩
143 執
144 報
145 囿
146 籌
147 較
148 瑲
149 匏
150 鄂
151 璜
152 蒻
153 梧
154 ＊磬
155 諦
156 鹵
157 淶
158 漑
159 漳

160 沇
161 潓
162 泡
163 渮
164 渻
165 ＊ 洨
166 淨
167 池
168 淮
169 沭
170 洋
171 濁
172 渚
173 洹
174 洛
175 瀷
176 滌
177 濡
178 溱
179 湮
180 湳
181 滻
182 瀙
183 ＊ 浅
184 涑
185 洐
186 灑
187 ＊ 叉
188 漾
189 袞
190 函
191 艀
192 蛤
193 緋
194 紛
195 牂
196 羯
197 銘
198 黝
199 褻
200 矍
201 㾓 莎
202 鸛
203 殀
204 貲
205 盬
206 ＊ 瑤
207 ＊ 粲
208 ＊ 戌
209 ＊ 粕
210 ＊ 梏
211 ＊ 桎
212 ＊ 叉
213 謚
214 誰
215 砦
216 鮨
217 栁
218 鼉
219 鱓
220 ＊ 洨
221 涪
222 ＊ 浅
223 甓
224 蓑
225 矜
226 舫
227 瓸
228 ＊ 戌
229 鼞
230 ＊ 鼛
231 鼛
232 梬
233 輜
234 ・緼
235 轈
236 慉
237 筑
238 栟
239 椶
240 鼎
241 讀
242 ＊ 粕
243 ＊ 梏
244 ＊ 桎
245 虫
246 甃
247 ＊ 粲
248 坏
249 孑

○「補正」に收録されている順に通し番号をつけた。

○表中の＊は重出字

洨（165・220）　粕（209・242）　梏（210・243）　桎（211・244）は二ケ所とも同文

鼛（154・230）　浅（183・222）　叉（187・212）　粲（207・247）　戌（208・228）

は多少の異同あり。

瑤（66・206）は注の種類を異にする。

○130（序）は説文巻十五の序の中の一字についての注。

○212叉字より筆跡を異にする。

○223甓字よりまた筆跡が変わり、空白が多くなる。

○242粕字より一葉の表はすべて空白、ただし最終葉は裏が空白。